

言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 松田 智穂子
論文題目 Derek Walcott's Theatrical Works and His Challenges as a Postcolonial
Caribbean Man of Theatre
論文審査委員 中井亜佐子 三浦玲一 冬木ひろみ

1. 本論文の内容と構成

Introduction

Derek Walcott as a Man of Theatre and the Gender Perspective on his Plays

Chapter 1

Creating a National Theatre in Trinidad: Walcott's Early Career and the Trinidad Theatre Workshop

Chapter 2

Escaping from Colonial Boyhood: Reaching 'Manhood' in *T-Jean and His Brothers* (1957)

Chapter 3

Don Juan in the Old and New Worlds: *The Joker of Seville* (1974)

Chapter 4

Pantomime (1978), Trinidad Carnival, and Tourism as a New Colonial System

Chapter 5

Living for Caribbean Theatre: The New Caribbean Cleopatras in *A Branch of the Blue Nile* (1983)

Appendix

Derek Walcott in Conversation

2. 本論文の概要

本博士学位請求論文は、セントルシア出身の文学者デレク・ウォルコット (Derek Walcott) の劇作品をジェンダー批評および演劇論の観点から分析したものである。1992年にノーベル文学賞を受賞したウォルコットはもっぱら詩人として知られており、その演劇作品についてはすでに絶版となったものも多く、先行研究も少ない。本論文は、劇中劇やメタ演劇といった要素を持つ作品4本におけるジェンダー・セクシュアリティの表象を緻密に分析するとともに、上演に関する資料収集やウォルコット本人へのインタビューなど地道な調査を行うことによって、たんなるテキスト批評にとどまらない演劇的な視野からも議論を展開している。

本論文の理論的な枠組みを提示している序章では、カリブ文学における男性性の概念が再検討されている。ウォルコットの演劇作品には女性蔑視が明白に表れていることがあり、しばしばその男性中心主義が批判されてきた。しかし、筆者の主張によれば、西洋フェミニズム批評によって普遍化されたジェンダー規範は、植民地支配と奴隷制という歴史的経験を通じて形成されたカリブ社会の状況にそのまま当てはめることはできない。カリブの社会と文化においては黒人男性

もジェンダー的にマイノリティなのであり、ウォルコットの男性中心主義はむしろ、カリブの黒人男性に特徴的に見られる男性性の欠如の裏返しであり、作品を通じて男性性の復権を志したのではないかと筆者は考える。

個々の作品の分析に先立って、第一章はまず、ウォルコットの演劇活動のもっとも重要かつ長期的な拠点となった1959年設立の劇団トリニダード・シアター・ワークショップをめぐる歴史的記述と、彼の演劇論の考察に充てられている。トリニダード・シアター・ワークショップは、カリブに「国民文化」を作り出すという明確な目的を打ち出した演劇活動であった。ウォルコットが彼の演劇論において想定する「国民」(ネイション)とは、セントルシア、トリニダードといった狭義の国家の枠にとらわれるものでは無論なく、人種・文化的にも階級的にも多様かつ異種混血的なカリブにおいて、そうした混雑性そのものに立脚した共同体であった。すなわち彼の演劇活動は、そうした新しい国民共同体を立ち上げるという構想であった。しかしながら、理論的には人種・文化の融合を目指しつつ、方法論的には人種・文化の多様性を強調することになるナショナル・シアター構想には、乗り越えられない限界があった。また、そうした国民文化運動が、多様性を許容しつつも女性を巧妙に排除し続けていた点が指摘されている。

第二章以下は、個々の演劇作品が、出版された脚本テキストをもとに緻密に分析される。第二章では初期の作品 *T-Jean and His Brothers* (1957) が取り上げられる。カリブ黒人民話を下敷きにしたこの作品では、三人兄弟のもっとも年少で腕力も知力にも劣るTi-Jean が悪魔との戦いに勝利する。Ti-Jean と悪魔の戦いは、「幼児化」(infantilization)された黒人奴隷と白人奴隷主の戦いとして読解される。「幼児化」という語はカリブ植民地において黒人奴隷を管理する際に「女性化」よりも好んで使用されたが、それは、奴隷化された黒人男性から「成熟した」白人男性をモデルとする男性性を奪った上で、庇護される存在として扱うことで、彼らの意識をジェンダー未分化状態まで退行させるためであったと筆者は指摘する。また、筆者の主張によれば、この作品においてウォルコットは、植民地支配と母系社会によって居場所を奪われていたカリブの黒人男性の地位を復権し、黒人男性を中心とする新しい家族関係とカリブのナショナル・アイデンティティを形成しようとしていた。しかし、この作品の結末では、Ti-Jean に「出産」を経験させることによって女性の社会的役割及び女性性を接收しようとしており、むしろ女性性をなくしてはカリブ黒人男性の復権が不可能であることを暗示している。

第三章では、ウォルコットが英国ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーに委託されて執筆した音楽劇 *The Joker of Seville* (1974) が論じられる。17世紀のスペインの劇作家ティルソ・デ・モリーナが創作して以来、色事師ドン・ファンはモリエール、モーツァルト、バイロン、ブレヒトなど、ヨーロッパの文学者および芸術家に多大なインスピレーションを与えてきた。ドン・ファンはヨーロッパ社会とキリストの根底にある伝統的な異性愛主義と男性中心主義を体現する人物とみなされてきたが、近年のジェンダー・セクシュアリティ批評ではむしろ伝統的、異性愛的な性規範を攪乱する存在と解釈されることもある。*The Joker of Seville* においてウォルコットは、ドン・ファン物語にさらにポストコロニアルなひねりを加え、ドン・ファンによる女性の強姦を植民地的欲望の物語に書き換えている。筆者は、登場する女性の人物造型の相違など、ウォルコットの書き換えの戦略を細かく分析したうえで、ウォルコットが植民地支配を通じてカリブ海地

域にもたらされたキリスト教的な価値観に異議を唱えていると結論付けている。

第四章では、カリブの宿屋を舞台とした二人芝居 *Pantomime* (1978) が取り上げられる。二人の登場人物、英国白人のハリーと黒人従業員ジャクソンの権力関係が、劇中劇で演じられる『ロビンソン・クルーソー』を下敷きに描き出されているが、劇の結末部においては支配者、被支配者の関係にある二人の男性が、女性を介して「ホモソーシャルな絆」を作り出していると筆者は指摘する。また本章後半では、この作品のなかで言及されているカリブの黒人伝統芸能（ジャクソンはカリブソの歌手である）とツーリズムの関係が論じられ、カリブ現代演劇が商業的に搾取される危険性を孕んでいる点が示唆されている。

第五章で取り上げられる *A Branch of the Blue Nile* (1983) は、トリニダードの劇団がシェイクスピアの『アントニーとクレオパトラ』を製作するプロセスを描いたメタ演劇である。クレオパトラ役を演じるには肌の色が黒すぎると悩み、英国流の発音を強制しようとする白人舞台監督と衝突する女主人公シーラの葛藤を通じて、ウォルコットは、独立後のカリブが植民地時代の遺産である英語・英文学とどのように向き合うべきかという問題を提起する。だがシーラは、男性の演劇仲間がニューヨークやロンドンの劇場で失敗するのに対して、ついには第一世界の演技法にとらわれない自分自身のクレオパトラを発見する。この作品を通じてウォルコットは、初期の作品に見られた女性蔑視を乗り越えたと筆者は考えている。

本論文には付録 (Appendix) として、2008年1月28日（セントルシア）、同年4月8日（ニューヨーク）で行われたウォルコットとのインタビューが収録されている。演劇と詩作品の違いに関する本人の意見などの重要な内容を含んだ、研究者には貴重な資料である。

3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果は、まず第一に、一般にあまり知られず本格的な研究の少ないウォルコットの演劇作品を、ジェンダー批評、とくに「男性性」に注目する独自のアプローチによって緻密に分析している点である。本論文で取り上げられた4作品は、いずれも先行テキストの書き換え、劇中劇、メタ演劇といったポストコロニアル文学及びカリブ文学における重要なモチーフを含むものであり、こうした貴重な作品群を「発掘」し、批評・分析を加えることの意義はきわめて大きいと言える。

第二に、一次資料、二次資料を丹念に調査し、すべての章で社会的背景を実証的に分析しつつウォルコットの思想を炙り出している点であり、その論考には、テキスト分析のみに終始しない厚みがあり、説得力がある。とくに第一章のトリニダード・シアター・ワークショップをめぐる議論は、地道な資料収集の成果をまとめ上げた優れた論考である。

第三の成果は、先行研究やフェミニズム、ジェンダー論、ポストコロニアル批評などの批評理論に関して十分な目配りをしつつ、従来の批評を乗り越えようとする独自の見解を打ち出している点であり、その鋭い批評意識は高く評価できる。

しかし、本論文にも、いくつかの点で問題がないわけではない。まず第一に、戯曲テキストにおけるジェンダー表象の分析と演劇論的考察とのつながりの悪さが、しばしば露見している点である。また、あるときには西洋フェミニズムを批判しつつ、別のときには西洋フェミニズムの理

論枠に則ってウォルコットを擁護するなど、論文全体を通して見た際に微妙な論旨のねじれが見られる。また、米国の大学でのセクシャル・ハラスメント疑惑など、伝記的「逸話」から見たウォルコットのジェンダー観とテキスト分析から得られる結論とのあいだのギャップに関しても、突っ込んだ議論があってもよかった。

第二に、ナショナル・シアター設立をめぐる歴史的考察に関しては、アイルランドの演劇運動や同時代のアフリカの演劇運動など、類似する事例との比較をすることによって、民族運動と演劇との関わりをより広い視野に立って考えることができたのではないかと思われる。

第三に、本論をウォルコット論として評価した場合、やはり彼の文体や言語そのものを、彼の詩作品との比較から論じる視点があってもよかっただろう。さらにはまた、メディア論として演劇をより有効に論じるためには、ウォルコットが常に複数のメディアにまたがって仕事を続けてきたこと自体にも、目を向けるべきであった。

しかしながら、これらの問題点は、けっして本論文が達成した成果の大きさを損なうものではない。以上のことから審査員一同は、本論文が独創性に富むすぐれた論文であり、当該分野の研究に十分に寄与したと認め、一橋大学博士（学術）の学位を授与するのが適当であると考えている。

最終試験結果要旨

2011年2月9日

受 験 者 松田 智穂子
最終試験委員 中井亜佐子 三浦玲一 冬木ひろみ

2011年1月20日、学位請求論文提出者、松田智穂子氏の論文及び関連分野について、本学学位規定第8条第1項に定められた最終試験を実施した。

試験において、提出論文“Derek Walcott’s Theatrical Works and His Challenges as a Postcolonial Caribbean Man of Theatre”に関する問題点および関連分野についての質疑を行ない、説明を求めたのに対して、松田智穂子氏は適切な説明を以って応えた。

よって審査委員一同は、松田智穂子氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。